7 月 31 日のメッセージ

聖書：コリントの信徒への手紙二　6：　1－10

「真理の言葉、神の力によって」

私たちが神の御言葉に聞き、真理に従い続けようとするのはなぜでしょうか。

第一にそれは自分のためです。「こんな私のために主は十字架につけられた。」「こんな私のために主は復活された。」私という存在を肯定してくださる神と共に歩むことで、自分自身を受け入れ、前を向いて歩いて行くことができます。

しかし、それだけでは神の思いを全て受け止めたことにはならないでしょう。なぜなら、「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」(創世記 1:31)のだから。

それゆえ、真理に従う第二の理由は、自分だけでなく隣人も救いの内に存在していることを証しするためです。

イエスは、すでに弟子となった 12 人を二人ずつ組にして人々のところへ遣わされました(「そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を授け、」マルコによる福音書 6:7)。しかも、「汚れた霊に対する権能」まで授けられました。そして、弟子たちの働きによって神の国はますます豊かに宣べ伝えられたのです。

もっとも、毎回上手くいったわけではありません。フィリポ･カイサリア地方では、霊を追い出すことができません(「霊がこの子に取りつくと、所かまわず地面に引き倒すのです。……この霊を追い出してくださるようにお弟子たちに申しましたが、できませんでした。」マルコによる福音書 9:18)。この場面では、イエスが霊を叱りつけると出て行った(「イエスは、……汚れた霊をお叱りになった。『……わたしの命令だ。この子から出て行け。二度とこの子の中に入るな。』すると、霊は叫び声をあげ、ひどく引きつけさせて出て行った。……」マルコによる福音書 9:25-26)ことから、最初から無理な案件ではなかったでしょう。

ただ、続くイエスの言葉「この種のものは、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ」(マルコによる福音書 9:29)から想像すると、弟子たちの失敗が見えるように思います。弟子たちは自分に権能が授けられたことで、さも自分が強くなったように思ったのではないでしょうか。そして、自分の力で、自分の武器で霊を追い出そうとしたことが失敗につながった、と。

聖書に登場する人物は皆、自分の武器で戦っていると思うかもしれません。しかし例えば、ゴリアテと対峙したダビデはこう言います。

「お前は剣や槍や投げ槍でわたしに向かって来るが、わたしはお前が挑戦したイスラエルの戦列の神、万軍の主の名によってお前に立ち向かう。」(サムエル記上 17:45)

「主は救いを賜るのに剣や槍を必要とはされないことを、ここに集まったすべての者は知るだろう。」(サムエル記上 17:47)

神の力、神の助けによってのみ、私たちは神ならぬものと向き合い、打ち克つことができるのです。兜をのせ、鎧を着け、自分を大きく見せる必要など無いのです。「神の道は完全／主の仰せは火で練り清められている。すべて御もとに身を寄せる人に／主は盾となってくださる。」(詩編 18:31)ことを信じ、神と共に前を向くのみです。

そして、神からの恵みを無駄にしないよう、「純真、知識、寛容、親切、聖霊、偽りのない愛、真理の言葉、神の力によって」(コリントの信徒への手紙二 6:6-7)、神に仕え、隣人に仕えて参りましょう。